

数量・程度を表すダケ節の統語論的特徴と解釈

—空演算子移動分析の観点から—

岡田 理恵子

1 はじめに

本稿では日本語の以下のような、節の形で数量および程度を表す表現について考察する。

- (1) a. 次郎は、[太郎が食べた] だけ、ケーキを食べた
b. [子育てに苦労した] だけ、子供がかわいいのはあたりまえだ

上記の例では節に「だけ」という接辞的な要素が後続する形で数量および程度を表している。以下、このような表現をダケ節と呼ぶ。ダケ節に関しては奥津 (1986) に記述が見られる。奥津 (1986) の大きな特徴は、「だけ」には形式副詞、形式名詞、取り立て詞の3つがあると述べていることである。本稿では取り立て詞は扱わないので形式副詞、形式名詞の「だけ」の記述について概観することにする。

奥津が形式副詞、形式名詞というカテゴリーに「だけ」を分けている基準は、「だけ」が表す意味である。程度を表すものを形式副詞と呼び、数量を表すものを形式名詞と呼んでいる。

(2)、(3) は節を伴った形で程度を表す「だけ」の例^{*1}、(4) は節を伴った形で数量を表す「だけ」の例である。

- (2) できるだけ早く論文を仕上げる (奥津 (1986):69(1-2) 一部改変)
(3) 安ければ安いだけよく売れる (奥津 (1986):70(2-1) 一部改変)
(4) 次郎は [太郎が食べた] だけケーキを食べた

奥津 (1986) では「だけ」の意味記述にとどまり、ダケ節内部の構造については触れられていない。また、奥津 (1986) の記述では、程度を表す「だけ」と数量を表す「だけ」はそれぞれ辞書的な意味として「程度」「数量」という意味を持ち、別々に辞書登録されているということになる。

^{*1} 奥津は (2) のダケ節は上限を表しており、(3) のダケ節は比例を表しているとして、程度を表す形式副詞としての「だけ」には2つの場合があると述べているが、本稿ではダケ節の意味分類には深く立ち入らない。

しかし、数量用法のダケ節と程度用法のダケ節には、それぞれの節内部に関して次のような違いが見られる。まず (5) が示すように、数量用法のダケ節は、その節内に遊離数量詞をとることができない。

- (5) a. 花子は [太郎がケーキを食べた] だけ、クッキーを食べた
b. *花子は [太郎がケーキを 10 個食べた] だけ、クッキーを食べた

節内に遊離数量詞が現れていない (5a) が容認可能であるのに対し、節内に遊離数量詞が現れている (5b) は容認不可能である*²。

また、程度用法のダケ節は節内に程度副詞*³を明示的にとることができない。以下の例を見てみよう。

- (6) a. [(課長の私に対する) 期待が ec 大きくなった] だけプレッシャーも大きくなった
b. *[(課長の私に対する) 期待がとても大きくなった] だけプレッシャーも大きくなった (程度用法として)
- (7) a. [子育てに ec 苦労した] だけ子がかわいいのは当たり前でしょう
b. *[子育てに非常に苦労した] だけ子がかわいいのは当たり前でしょう (程度用法として)

程度副詞が現れていない (6a) は容認可能であるが、程度副詞「とても」が現れている (6b) ではダケ節がプレッシャーの大きさの程度を表している解釈は困難である。また、(7) でも、ダケ節内に程度副詞が現れていない (7a) ではダケ節が「かわいい」の程度を表しているという解釈が得られるが、ダケ節内に程度副詞「非常に」がある (7b) では、ダケ節が「かわいい」の程度を表しているという解釈は難しい。この場合、ダケ節は「子がかわいい」ことのいわば「理由」のような解釈となる*⁴。

*² もっとも、遊離数量詞ではなく、「10 個のケーキ」といった名詞修飾の形で数量を明示することはできない。

(i) *花子は [太郎が 10 個のケーキを食べた] だけ、クッキーを食べた
しかし 3.4 節で見るように、ダケ節の見せる統語的・意味論的特徴は遊離数量詞のそれと類似しており、ここで見ているダケ節に関わっている数量表現は遊離数量詞であると考えたと説明がつく現象がいくつか見られる。そのため、問題としている空所は遊離数量詞位置であると考ええる。

*³ 本稿では「程度副詞」と一括りにして議論しているが、程度副詞についてはその分類など複雑な議論がある。今後はそれらも考慮に入れていく必要がある。

*⁴ 「ダケ」にはもう一つ「理由用法」というのがあるとされている。理由用法の場合、「ダケ」は次のように「ダケに」の形で現れる。理由用法については奥津 (1986)、前

以上から、数量用法のダケ節には遊離数量詞が明示的に現れることはできず、程度用法のダケ節には程度副詞が明示的に現れることはできないと言えるだろう。このような特徴は、ダケ節と同様に節形式で数量・程度を表す次のような表現にも見られる。

- (8) ジョンは [ボブが家賃に ec 使う] 半分をギャンブルに使う
(Ishii (1990):81(4a), 一部改変)

- (9) [月曜日の会議に集まった] 人数

(8) は節に「半分」「三倍」「5 パーセント」などの「関係」を表す名詞類が後続する表現で、Ishii (1990) で「半分」関係節 ('half'-relatives) と呼ばれているものである。(9) は節に「人数」「個数」「枚数」「量」など数量のスケールの名前を表す名詞類が後続する例で、江口 (2002) に記述が見られる。後で詳しく見るが、これらの表現にも遊離数量詞が明示的に現れてはいけない。

- (10) a. [太郎がケーキを食べた] 半分、次郎はまんじゅうを食べた
b. *[太郎がケーキを 3 つ食べた] 半分、次郎はまんじゅうを食べた

- (11) a. [太郎が 寿司 を食べた] 量 (江口 (2002):2153(14a))
b. *[太郎が 寿司 を 30 個食べた] 量 (江口 (2002):2153(14b))

「半分」関係節は Ishii (1990) など、空演算子移動が関与している構造を持つと論じられている。「人数」節に関しては、江口 (2002) では明示的には述べられていないがこちらも空演算子移動が関与していると思われる (詳しくは次節で見る)。空演算子移動は典型的には以下のような特徴を見せる。

- (12) a. 空演算子の移動前の位置は空所となる。
b. 島の制約に従い、空所と先行詞との依存関係は非有界的 (unbounded) である (局所的ではない) *⁵。

田 (1996) 参照。

- (i) 仕事を任された方は、課題が大きいだけに大変だ

*⁵ ただし、有界的な空演算子移動もある。例えば英語では tough 構文は時制節からの抜き出しは可能であるが非時制節からの抜き出しは不可能である (Huang (1999) など)。

- (i) a. This problem is too easy [for me to ask the teacher [to help me solve e1]].
(Huang (1999):440(26) 一部改変)

節内に空所があることは移動の関与を示す一つの証拠と見なすことができ、「半分」関係節などと同様に節の空所が義務的であるダケ節にも空演算子移動の関与が十分に予測される*6。

本稿では奥津があげた数量用法、程度用法は節内部の構造、具体的には空演算子の移動前の位置によって導き出せるものであることを示すことを目的とする。まず、2節でダケ節と同様に節形式で数量・程度を表す表現に関する先行研究を概観し、それをふまえて3節で、ダケ節の移動の性質を検証し、数量用法のダケ節には遊離数量詞位置からの空演算子移動が、程度用法のダケ節には程度副詞位置からの空演算子移動が関与しているということを示していく。

2 先行研究

「半分」関係節、「人数」節の統語論的特徴についてはいくつかの先行研究がある。本節では、まず、「半分」関係節、「人数」節に関する先行研究を概観し、若干の修正を加える。そして、「半分」関係節・「人数」節には空演算子移動が関与していることを確認する。

2.1 「半分」関係節

「半分」関係節については、Ishii (1990)、黒田 (1999) などの研究がある。(以下、例文中の ec は空所を示す。)

- (13) a. ジョンは [ボブが家賃に ec 使う] 半분을ギャンブルに使う
(Ishii (1990):81(4a), 一部改変)

-
- b. *? This problem is too easy [for me to think [that I can ask the teacher [to help me solve e1]]]. (Huang (1999):440(27) 一部改変)

*6 本稿では詳しくは触れないが、以下のような文脈の下ではダケ節の節内に遊離数量詞を明示的にとることができる。

(i) (文脈：酒屋さんに空き瓶を 5 本持っていくと、ジュースを 1 本もらえる。)

太郎は、[酒屋さんに空き瓶を 10 本持っていった] だけ、ジュースをもらった「半分」関係節でも同様の解釈ができ、その場合節内に遊離数量詞をとることが可能になる。しかし同様の文脈を設定しても「人数」節は節内に遊離数量詞をとることはできない。遊離数量詞が現れる場合は、島の制約に従わないなど、移動の性質が見られず、移動が関与していないものと思われる。本稿では移動の関与する場合しか扱っていないが、ダケ節および「半分」関係節には移動が関与するものと関与しないものの 2 種類があるのではないかと考えている。詳しくは岡田 (2003) を参照。

- b. マリーは [亭主がひと月に ec 稼ぐ] 倍を半月で稼ぐ
(Ishii (1990):81(4b), 一部改変)

「半分」関係節に空演算子移動が関わっているとする証拠として、Ishii (1990) は以下の 3 つの点を上げている。

- 「半分」関係節内の空所が義務的である。

- (14) *ジョンは [ボブが家賃に お金を 使う] 半分为ギャンブルに使う
(Ishii (1990):83(6), 下線は筆者)

- 空所と節に後続している「半分」などの要素との関係は非有界的である。

- (15) ジョンは [人が [マリーが [自分の妹が毎月 ec もらうと] 信じていると] 言っている] 半分为貯金する (Ishii (1990):83(8))

- 「半分」関係節は島の制約に従う。

- (16)^{??}ジョンは [マリーが [[自分の妹が ec 稼いだ] 事実] を認めた] 倍を稼ごう
と思っている (Ishii (1990):83(9))

- (17)^{??}ジョンは [マリーが [ec 稼いでから] ヨーロッパに行った] 半分も稼がな
かった (Ishii (1990):83(10))

以上が Ishii (1990) の記述である。

しかし、黒田 (1999) の例に見られるように、「半分」関係節には項の空所は義務的ではなく、項は明示的に現れても構わない。(18)、(19) ではそれぞれ「椎茸を」「お金を」という項が現れているが非文にはならない。

- (18) [太郎が椎茸を採った] 半分、次郎は松茸を採った

- (19) [太郎がお金を稼いだ] 半分、花子は貯金をギャンブルに使う

しかし、通常、「半分」関係節の節内に遊離数量詞が現れることはできない。「半分」関係節の節内に遊離数量詞がない (20a) は容認可能であるが、節内に遊離数量詞「3 つ」が現れている (20b) では非文になっている。

- (20) a. [太郎がケーキを食べた] 半分、次郎はまんじゅうを食べた

- b. *[太郎がケーキを 3 つ食べた] 半分、次郎はまんじゅうを食べた

このように遊離数量詞位置が空所になっている「半分」関係節も、以下の例が示すように非有界的依存関係を示す。

- (21) [花子が [次郎が [太郎がケーキを ec 食べた] と信じている] と言っている]
半分、次郎はまんじゅうを食べた

そして島の制約にも従う。

まず複合名詞制約について見てみる。

- (22) *[太郎が [ケーキを ec 食べた人] を知っている] 半分

(22) では、「[ケーキを ec 食べた人]」という複合名詞句の中の空所と「半分」を関係付けることは不可能となっている。よって「半分」関係節は複合名詞制約に従うと言える。

次に WH の島条件に従うかどうかを見てみる。

- (23) *? [花子が [誰がケーキを ec 食べたか] 知っている] 半分

(23) では、「[誰がケーキを ec 食べたか]」という WH の島の中の空所と「半分」を関係付けることは不可能となっており、「半分」関係節は WH の島条件に従っていると言える。

最後に付加詞句条件に従うかどうか見てみる。

- (24) *? [太郎が [ケーキを ec 食べてから] 遊びに出かけた] 半分

(24) では、「[ケーキを ec 食べてから]」という付加詞句の中の空所と「半分」を関係付けることは不可能となっており、「半分」関係節は付加詞句条件に従うと言える。

以上をまとめると、「半分」関係節は次のような特徴を持っていると言える。

- (25) 「半分」関係節の性質

- a. 遊離数量詞位置の空所が義務的である。
- b. 島の制約に従い、「半分」などの名詞と空所との関係が非有界的である。

遊離数量詞位置の空所が義務的であり、その空所と節に後続している「半分」「3倍」などの要素との間に依存関係が見られる。その依存関係は非有界的なものであり、数量詞繰り上げ (Quantifier Raising, QR) のような局所的な関係ではない。そして島の制約にも従うということから、「半分」関係節には遊離数量詞位置からの空演算子移動が関与しているということが言えるだろう。

2.2 「人数」節

2.2.1 江口 (2002)

「人数」節に関しては、江口 (2002) に詳しい記述がある。江口 (2002) は、「人数」節と遊離数量詞との間に類似点が見られるとして、以下のような特徴をあげている。以下、江口 (2002) に従い遊離数量詞構文において数量詞が数えている対象のことを「ホスト」と呼び下線を付す。

- 「人数」節の中に遊離数量詞をとることはできない。

- (26) a. [太郎が 寿司を 食べた] 量 (江口 (2002):2153(14a))
b. *[太郎が 寿司を 30 個食べた] 量 (江口 (2002):2153(14b))

(26a) では「人数」節内に遊離数量詞は現れておらず、容認可能である。それに対し、遊離数量詞「30 個」が顕在している (26b) は容認不可能である。

- 遊離数量詞の場合と同様にホストの名詞の格に制限がある。

(27a)、(28a) に見るように、道具のデ格や起点のカラ格は遊離数量詞のホストになりにくい*7。それと同様の制限が「人数」節にも見られる。ホスト名詞句が道具のデ格である場合 (= (27b)) や起点のカラ格である場合 (= (28b)) は容認不可能である。

- (27) a. *太郎は 工具で 三つコンピューターを修理した (江口 (2002):2153(15a))
b. *[太郎が 工具で コンピューターを修理した] 個数 (江口 (2002):2153(15b))
- (28) a. *花子には ファンから 3 人花束が届いた (江口 (2002):2153(16a))
b. *[花子に ファンから 花束が届いた] 人数 (江口 (2002):2153(16b))

- ホストの構造的・意味論的特徴 1

(29a) が示すように遊離数量詞は一般的に名詞句内部の主要部以外の名詞をホストにすることはできないが、(30a) や (31a) が示すように不可分離所有物を表わす名詞や出来事名詞を主要部とした名詞句の内部にある要素はホストになれる*8。こ

*7 奥津 (1969)、井上 (1978) など参照。

*8 Kikuchi (1994) 参照。

の規則は「人数」節にも同様に見られる。(29b) が示すように名詞句内部の主要部以外の名詞がホストの場合は「人数」節は不可能であるが、(30b) のような不可分離所有物を表す名詞の場合や、(31b) のように出来事名詞の場合には「人数」節は容認可能である。

- (29) a. *次郎は 友達の ノートを] 3 人借りている (江口 (2002):2154(17a))
 b. *[次郎が 友達の ノートを] 借りている] 人数 (江口 (2002):2154(17b))

- (30) a. 花子は 子供たちの 爪を] 3 人切った (江口 (2002):2154(18a))
 b. [花子が 子供たちの 爪を] 切った] 人数 (江口 (2002):2154(18b))

- (31) a. あの大学が 留学生の 受け入れを] 30 人断った (江口 (2002):2154(19a))
 b. [あの大学が 留学生の 受け入れを] 断った] 人数 (江口 (2002):2154(19b))

● ホストの構造的・意味論的特徴 2

名詞の属性に関わるような数量は遊離数量詞として扱うことができない。(32a) の「2000cc の」は車の台数などではなく車が持つ属性を表している。このような数量は (32b) が示すように遊離数量詞として扱うことはできない。「人数」節にも同様の規則が当てはまり、(32c) は容認不可能である。

- (32) a. 太郎は 2000cc の車を買った (江口 (2002):2154(20a))
 b. *太郎は 車を 2000cc 買った (江口 (2002):2154(20b))
 c. *[太郎が 車を 買った] 排気量 (江口 (2002):2154(20c))

以上に見るように、「人数」節は遊離数量詞と類似した特徴を見せる。遊離数量詞が可能な場合、「人数」節も可能であり、遊離数量詞が不可能である場合は、「人数」節も不可能である。

江口 (2002) は、以上のような現象は「人数」節を「遊離数量詞の関係節化」であると仮定すると説明できるとしている。江口 (2002) の言う「遊離数量詞の関係節化」とは次のようなものである。まず、江口 (2002) は関係節化の表面的な性質を捉え、以下のように定義する。

- (33) a. 節内部の一要素を消去する。

- b. 消去された要素を節の後の被修飾要素とする。

(江口 (2002):2148(5))

通常、副詞は関係節化されないという議論が奥津 (1974) でなされており、いわゆる遊離数量詞は関係節化できないことから奥津 (1974:123) は遊離数量詞を副詞と考えるべきであるように見えると論じている。江口 (2002) の分析は、奥津 (1974) のような「副詞の関係節化が不可能である」という分析に対して、(33) の関係節化の定義を緩め、「消去された要素の品詞と被修飾要素 (つまり名詞) の品詞とは必ずしも同じでなくてよいと考える」ことにより、副詞も一部は関係節化が可能であるということを示したものである。つまり、「人数」節は遊離数量詞位置が空所になり、それに対応するような名詞が主要部になった構文である。(=(34)) 主要部となる「人数」「枚数」などの名詞はそれ自身では値を持たない、変項を含んだ名詞である。名詞修飾語をとることによって数える対象がその変項に代入されると値を返すものである。

- (34) [太郎が寿司を ec 食べた] 個数

江口 (2002) は、副詞の関係節化をこのように捉えると、次のような例も副詞の関係節化と捉えることができると指摘している*⁹。

- (35) a. [太郎が走った] 速さ / ? ゆっくりさ (江口 (2002):2159(26c))

- b. [息子が入学する] 時 (江口 (2002):2160(28a))

以上のような江口 (2002) の議論は明示的にはないが、移動の関与を示唆していると思われる (江口 (2002):注 12)。そこで、「半分」関係節の場合で見たように空演算子移動の関与があるかどうかを検証するために、島の制約に従うか、また、空所と「人数」などの名詞との関係が非有界的であるかどうかを見てみる。

まず「人数」節の空所と節に後続する「人数」などの名詞の関係が非有界的であるかどうかを見てみる。

- (36) [警察が昨日 [花子が [おととい店で松茸が ec 盗まれたと] 思っていると] 聞いた] 本数

*⁹ 江口 (2002) は本稿で扱っているダケ節も副詞の関係節化と考えられる可能性を示唆している。実際、ダケ節は節内の空所に関して「人数」節と類似した性質を見せる。しかし他の性質からダケ節はいわゆる関係節化とは考えにくいと思われる。詳しくは岡田 (2003) 参照。

(36) に見るように空所と節に後続している「本数」という名詞の間には無限に節が介在することができ、非有界的な依存関係であることが分かる。

では次に、「人数」節が島の制約に従うかどうかを見てみよう。

(37) a. [太郎がケーキを ec 食べた] 個数

b. *[太郎が [ケーキを ec 食べた人] を知っている] 個数 (複合名詞句制約)

(37) では「[ケーキを ec 食べた人]」という複合名詞句の中の空所と「個数」を関係付けることは不可能となっており、「人数」節は複合名詞制約に従うと言える。

(38) *? [花子が [誰がケーキを ec 食べたか] 知っている] 個数 (WH の島条件)

(38) では「[誰がケーキを ec 食べたか]」という WH の島の中の中の空所と「個数」を関係付けることは不可能となっており、「人数」節は WH の島条件に従うと言える。

(39) *? [太郎が [ケーキを ec 食べてから] 遊びに出かけた] 個数 (付加詞句条件) *10

(39) では「[ケーキを ec 食べてから]」という付加詞句の中の空所がケーキの「個数」を与えることが不可能となっており、「人数」節は付加詞句条件に従うと言える。

以上から、「人数」節も島の制約に従うと言えるだろう。

以上をまとめると、「人数」節には次のような特徴があると言える。

(40) 「人数」節の性質

- a. 節内の空所は遊離数量詞位置に対応し、その空所が義務的である。
- b. 島の制約に従い、空所と節に後続する「人数」などの名詞との関係は非有界的である。

*10 この例が容認可能であるという話者もいる。特に、「ケーキを」の後ろにポーズを置くと容認度が上がるようである。例えば、「このケーキにはキトサンが含まれており、ダイエットに効果的です。このケーキを食べてから散歩に行けば、エネルギー代謝がよくなります。ただし、ノーカロリーではありませんので、ケーキを、食べてから散歩に出かける個数が3つを超えないようにしてください。」しかしその場合は、「ケーキを」が節の外に出た表示が設定されていると考えられる。そこで「太郎が 昨日 ケーキを食べてから遊びに出かけた個数」のようにすると「ケーキを」が節の外に出た解釈は回避できる。(田窪行則先生との個人談話による。)

これらの性質は 2.1 節で見た「半分」関係節と並行した性質である。空所と節に後続する要素との関係が非有界的であり、かつ島の制約に従うことから、「人数」節にも空演算子移動が関与していると言えるだろう。

以上、本節では、「半分」関係節・「人数」節の先行研究を概観し、この 2 種類の節には遊離数量詞位置からの空演算子移動が関与していることを示した。次節では本節での観察結果をふまえてダケ節に見られる移動の性質を観察する。

3 ダケ節に見られる移動の性質

ダケ節については、筆者の知る限りでは節内部の統語的特徴についての議論はこれまでになされていない。そこで、本節では 2 節で見た先行研究を基にダケ節の統語論的特徴を記述し、ダケ節にも空演算子移動が関わっていることを主張する。

3.1 遊離数量詞・程度副詞の空所の義務性

1 節で見たように、数量用法のダケ節はその節内に遊離数量詞を明示的にとることができない。

(41) 数量用法

- a. 花子は [太郎がケーキを食べた] だけ、クッキーを食べた (= (5a))
- b. *花子は [太郎がケーキを 10 個食べた] だけ、クッキーを食べた
(= (5b))

節内に遊離数量詞が現れていない (41a) が容認可能であるのに対し、節内に遊離数量詞が現れている (41b) は容認不可能である。

また、程度用法のダケ節は節内に程度副詞を明示的にとることができない。

(42) 程度用法

- a. [(課長の私に対する) 期待が ec 大きくなった] だけプレッシャーも大きくなった (= (6a))
- b. *[(課長の私に対する) 期待がとても大きくなった] だけプレッシャーも大きくなった (程度用法として, = (6b))

- (43) a. [子育てに ec 苦労した] だけ子がかawaiiのは当たり前でしょう
(= (7a))

- b. *[子育てに非常に苦労した] だけ子がかわいいのは当たり前でしょう
(程度用法として, =(7b))

程度副詞が現れていない (42a) は容認可能であるが、程度副詞「とても」が現れている (42b) ではダケ節がプレッシャーの大きさの程度を表している解釈はできない。また、(43) でも、ダケ節内に程度副詞が現れていない (43a) ではダケ節が「かわいい」の程度を表しているという解釈が得られるが、ダケ節内に程度副詞「非常に」がある (43b) では、ダケ節が「かわいい」の程度を表わしているという解釈は難しい。

以上から、数量用法のダケ節には遊離数量詞が明示的に現れることはできず、程度用法のダケ節には程度副詞が明示的に現れることはできないと言えるだろう。

3.2 非有界性

ダケ節も「半分」関係節や「人数」節と同様に、空所と「だけ」の関係は非有界的である。(44) は数量用法の例、(45) は程度用法の例であるが、どちらも空所と「だけ」の間には無限に節が介在することができる。

- (44) 太郎は [人が [次郎が裏山で松茸を ec 採ってきと] 言っている] だけ椎茸にすり替えた
- (45) 太郎の母親はいつも [太郎が [夏休みを ec 楽しんだと] 思っている] だけ、
(太郎の) 宿題の手伝いで苦労する

3.3 島の制約

本節では、ダケ節が島の制約に従うかどうかを見ていく。まず複合名詞制約について見てみる。

- (46) a. [太郎がケーキを ec 食べた] だけ、次郎はまんじゅうを食べた
b. *[太郎が [ケーキを ec 食べた人] を知っている] だけ、次郎はまんじゅうを食べた

(46) では「[ケーキを ec 食べた人]」という複合名詞句の中の空所と「だけ」を関係付けることは不可能となっており、ダケ節も複合名詞制約に従うと言える。

次に、WH の島条件について見てみる。

- (47) *? [花子が [誰がケーキを ec 食べたか] 知っている] だけ、次郎はまんじゅうを食べた

(47) では「[誰がケーキを ec 食べたか]」という WH の島の中の空所と「だけ」を関係付けることは不可能となっており、ダケ節は WH の島条件に従うと言える。次に、付加詞句条件について見てみる。

- (48) *? [太郎が [ケーキを ec 食べてから] 遊びに出かけた] だけ、次郎はまんじゅうを食べた

(48) では「[ケーキを ec 食べてから]」という付加詞句の中の空所と「だけ」を関係付けることは不可能となっており、ダケ節は付加詞句条件に従うと言える。

以上より、ダケ節も「半分」関係節・「人数」関係節と同様、島の制約に従うと言えるだろう。

以上、ダケ節の移動の性質を観察した。結果をまとめると次のようになる。

(49) ダケ節の性質

- a. 遊離数量詞・程度副詞の空所が義務的である。
- b. 島の制約に従い、空所と「だけ」の関係は非有界的である。

ダケ節内に見られる空所と「だけ」の間には非有界的依存関係が見られ、QR のような局所的な関係ではない。さらに島の制約に従うことから、ダケ節も「半分」関係節・「人数」節と同様、遊離数量詞位置あるいは程度副詞位置からの空演算子移動が関与していると考えられるだろう。

3.4 空所と節の解釈の関係

3.1 節、3.2 節、3.3 節では、ダケ節も「半分」関係節・「人数」節と同様、遊離数量詞および程度副詞の位置からの空演算子移動が関与していることを論じた。つまり「だけ」と節内の空所とを関係づけるために空演算子が移動する。このとき遊離数量詞位置から空演算子が移動すればその位置と関係づけられ、程度副詞位置から移動すればその位置と関係づけられることになる。

ダケ節には 1 節で見たように、数量を表す数量用法と程度を表す程度用法があるとされる。奥津 (1986) の説明では、それぞれの用法のダケ節には「だけ」自身に「数量」「程度」という辞書的意味があるということになる。しかしダケ節に空演算子移動が関与しているとする、空演算子がどの位置から移動しているかという違いによって数量用法と程度用法を導き出すことができる可能性がある。数量用法の

ダケ節が遊離数量詞位置からの空演算子移動によって導き出されるとすると、遊離数量詞位置からの空演算子移動が不可能である場合は数量用法の解釈は不可能になると思われる。また程度用法のダケ節が程度副詞位置からの空演算子移動によるものであるとすると、程度副詞位置からの空演算子移動が不可能である場合は程度用法の解釈が不可能になると思われる。

空演算子の移動前の位置の違いによって2つの解釈が導き出せるとすると、辞書に2つの「だけ」を登録する必要はなくなる。3.1節で数量用法のダケ節には遊離数量詞位置の空所が義務的であり、程度用法のダケ節には程度副詞位置の空所が義務的であると述べたが、3.5節、3.6節ではさらにその議論を補強する議論を行う。そして数量用法のダケ節は遊離数量詞位置からの空演算子移動が、程度用法のダケ節は程度副詞位置からの空演算子移動が関与しており、それにより数量用法、程度用法のダケ節が導き出されることを主張する。

3.5 数量用法

本節では2.2.1節で見た江口(2002)の議論に基づいて、数量用法のダケ節の空所が遊離数量詞位置の空所であることを示す。先に述べたように、江口(2002)は、遊離数量詞に関わる制限と同様の制限が「人数」節にも見られることを指摘し、それは「人数」節を遊離数量詞の関係節化であると捉えると説明がつくと述べている。以下、関連する例を再掲する。

- 「人数」節の中に遊離数量詞をとることはできない。

- (50) a. [太郎が 寿司 を食べた] 量 (= (26a))
b. *[太郎が 寿司 を 30 個食べた] 量 (= (26b))

- 遊離数量詞の場合と同様にホストの名詞の格に制限がある。

道具のデ格や起点のカラ格は遊離数量詞のホストになりにくい。それと同様の制限が「人数」節にも見られる。

- (51) a. *太郎は 工具 で 三つコンピューターを修理した (= (27a))
b. *[太郎が 工具 で コンピューターを修理した] 個数 (= (27b))

- (52) a. *花子には ファン から 3 人花束が届いた (= (28a))
b. *[花子に ファン から 花束が届いた] 人数 (= (28b))

- ホストの構造的・意味論的特徴 1

遊離数量詞は一般的に名詞句内部の主要部以外の名詞をホストにすることはできないが、不可分離所有物を表わす名詞や出来事名詞を主要部とした名詞句の内部にある要素はホストになることができる。同様の制限が「人数」節にも見られる。

- (53) a. *次郎は [友達の ノート] を] 3 人借りている (= (29a))
 b. *[次郎が [友達の ノート] を] 借りている] 人数 (= (29b))
- (54) a. 花子は [子供たちの 爪] を] 3 人切った (= (30a))
 b. [花子が [子供たちの 爪] を] 切った] 人数 (= (30b))
- (55) a. あの大学が [留学生の 受け入れ] を] 30 人断った (= (31a))
 b. [あの大学が [留学生の 受け入れ] を] 断った] 人数 (= (31b))

- ホストの構造的・意味論的特徴 2

名詞の属性に関わるような数量は遊離数量詞として扱うことができない。同様に、「人数」節も不可能である。

- (56) a. 太郎は 2000cc の車を買った (= (32a))
 b. *太郎は 車を2000cc 買った (= (32b))
 c. *[太郎が 車を 買った] 排気量 (= (32c))

ダケ節に関して、「だけ」と節内の空所とを関係づけるために空演算子が移動するとき、遊離数量詞位置から空演算子が移動すればその位置と関係づけられて数量用法の解釈になるとすると、遊離数量詞位置からの空演算子移動が不可能である場合は数量用法の解釈は不可能になると思われる。

そこで江口 (2002) で見たように、遊離数量詞が不可能である場合に数量用法のダケ節が不可能になるかどうかを見ていくことにする。

- ホストの名詞の格の制限

「人数」節が、ホストの名詞句が道具のデ格、起点のカラ格である場合、容認不可能であったのと同様に、ダケ節においても、ホストの名詞句が道具のデ格、起点のカラ格である場合、容認不可能である。以下の例を見てみよう。

- (57) a. *太郎は 工具で 三つコンピューターを修理した
 b. *[太郎が 工具で コンピューターを修理した] だけ (工具の数量の解釈)

- (58) a. *花子には ファンから 3 人花束が届いた
 b. *[花子に ファンから 花束が届いた] だけ (ファンの数量の解釈)

(57b) はデ格の例、(58b) はカラ格の例であるが、この場合ダケ節は容認不可能である。

● ホストの構造的・意味的特徴 1

遊離数量詞は一般的に名詞句内部の主要部以外の名詞をホストにすることはできないが、不可分離所有物を表わす名詞や出来事名詞を主要部とした名詞句の内部にある要素はホストになることができる。ダケ節においても同様の制限が見られる。

- (59) a. *次郎は [友達の ノートを] 3 人借りている
 b. *[次郎が [友達の ノートを] 借りている] だけ (友達の数量の解釈)

- (60) a. 花子は [子供たちの 爪を] 3 人切った
 b. [花子が [子供たちの 爪を] 切った] だけ (子供の数量の解釈)

- (61) a. あの大学が [留学生の 受け入れを] 30 人断った
 b. [あの大学が [留学生の 受け入れを] 断った] だけ
 (留学生の数量の解釈)

(59b) は名詞句内部の主要部以外の名詞をホストにした場合の例である。通常このような場合は容認不可能になるが、(60b) のような不可分離所有物の場合や(61b) のような出来事名詞の場合は容認可能となり、遊離数量詞と同様の制限が見られる。

● ホストの構造的・意味論的特徴 2

名詞の属性に関わるような数量は遊離数量詞として扱うことができない。同様に、ダケ節においても属性に関するような数量を表わすことはできない。

- (62) a. 太郎は 2000cc の車を買った
 b. *太郎は 車を 2000cc 買った
 c. *[太郎が 車を買った] だけ (「排気量」の解釈)

名詞の属性を表す数量は(62b) が示すように遊離数量詞として扱うことができない。このような数量の場合は(62c) のようにダケ節も容認不可能である。

以上の例に見るように、遊離数量詞が不可能な場合には数量用法のダケ節も不可能となる。ここで数量用法のダケ節が遊離数量詞位置からの空演算子移動によるものであるとすれば、ここで見た遊離数量詞と並行した性質について説明が与えられるように思われる。つまり、数量用法のダケ節が容認可能となるためには遊離数量詞位置に移動前の空演算子が位置していることが要求され、その位置からの移動が求められる。しかしそもそも遊離数量詞が不可能であるならばその位置が保証されず、ダケ節も不可能ということになる。

以上の議論より、数量用法のダケ節の空所は名詞修飾位置の空所ではなく、遊離数量詞位置の空所であるといえるだろう。

3.6 程度用法

3.1 節で程度用法のダケ節には程度副詞位置の空所があることを示した。ダケ節に空演算子移動が関与しているとすると、程度用法のダケ節は程度副詞位置からの空演算子移動によって空所と「だけ」が関係づけられることになる。このとき、程度副詞位置が保証されなければ程度用法のダケ節は不可能になると考えられる。そこで、本節では節内に程度副詞の位置が保証されない場合には程度用法のダケ節は不可能であることを示し、程度用法のダケ節の空所が程度副詞位置の空所であることを示す。

副詞には大きく分けて「情態副詞」「程度副詞」「陳述副詞」の3つがある^{*11}。程度用法のダケ節が程度副詞位置からの空演算子移動であるとする、情態副詞をとる動詞の場合、ダケ節は容認不可能になるはずである。なぜなら程度副詞の位置がないからである。例えば次の例を見てみよう。

- (63) a. 太郎は速く走った
b. *次郎は [太郎が走った] だけ速く走った
(*太郎が走る速さの程度=次郎が走る速さの程度)
- (64) a. 花子はきびきび動く
b. *太郎は [花子が動く] だけきびきび動く
(*太郎が動く機敏さの程度=花子が動く機敏さの程度)

^{*11} 「情態副詞」としては「速く」「しっかりと」などが、「程度副詞」としては「とても」「非常に」「かなり」などが、「陳述副詞」としては「まったく(～ない)」などが挙げられる。工藤(2000) 参照。

(63b) ではダケ節内に動詞「走った」を修飾する情態副詞「速く」が現れることのできる環境である。この場合、ダケ節が主節の「速く」の程度を表わす解釈は非常に難しい。同様のことが (64b) にも言える。

これに対し、ダケ節が (65) に示すような程度副詞をとることができる動詞をとる場合、程度用法の解釈が可能になる。

(65) に挙げた動詞は、森山 (1985) で「程度動詞」と呼ばれているものである。これらは程度副詞をとることができる。

- (65) a. 感情・感覚の動詞：悲しむ、喜ぶ、懐かしむ、苦しむ
- b. 主体が進展的 (漸次的変化) なもの：広がる、伸びる、増える
- c. 性状動詞：すぐれる、不足する
- d. 量的関係の変化動詞：得をする、損をする

(森山 (1985); pp. 62-63. 一部改変)

例えば「苦しむ」という動詞をダケ節の述語とすると、次のようにダケ節が程度を表す解釈が可能になる。(66) では、ダケ節は「心が痛む」程度を表している。

- (66) [子供が^{ec} 苦しむ] だけ、私は心が痛むのです

しかし、(65) に挙げた「程度動詞」以外の動詞はそのままでは程度副詞をとることができず、「たくさん」「よく」といった程度を持つ要素を補わなければ程度副詞をとることはできない。

- (67) a. 太郎は本をととても/非常に*(たくさん) 買った
- b. 太郎はととても/非常に*(速く) 走った

ダケ節の述語は (67) の「買った」「走った」のような程度副詞をとれない動詞であってはならない。次の例を見てみよう。

- (68) a. 次郎は [太郎が本を買った] だけ雑誌を買った
 - b. *次郎は [太郎が本を買った] だけ雑誌をたくさん買った
- (「たくさん」の程度を表わす解釈*¹²)

(68b) では「(本を) 買った」という、程度副詞をとれない動詞がダケ節の述語になっている。この場合ダケ節が「たくさん」の程度を表わすという解釈はできな

*¹² ここでは、「とても」などの程度副詞と程度用法のダケ節を同等の程度副詞であるように扱っているがこの点については検証が必要である。

い。このように、程度副詞をとれない動詞がダケ節の述語にきた場合、ダケ節は程度用法になることができない。

これに対し、「たくさん」は「とても」などの程度副詞によって修飾されることができるため、「たくさん」が入るとダケ節は程度副詞をとることのできる節となる。

(69) 次郎は [太郎が本をたくさん買った] だけ雑誌をたくさん買った

(70) 次郎は [太郎が速く走った] だけ速く走った

(69) のダケ節は「たくさん」があることで「太郎が本をととてもたくさん買った」のように程度副詞をとることができる。そして (69) は (68b) とは違って主節の「たくさん」の程度を表わす解釈が可能である。(70) は、情態副詞を含むダケ節であるが、この場合、「速く」という情態副詞は程度副詞によって修飾されることが可能である。つまり、「速く」があることで程度副詞をとりうる環境になっており、そのため程度用法の解釈が可能になっていると考えられる。

以上をまとめると、次のようになる。

- (71) a. ダケ節内の動詞が (65) にあげた程度動詞である場合はダケ節は程度用法の解釈が可能である。
b. 「買う」「走る」のようなそのままでは程度副詞をとることができないような動詞がダケ節内の述語になっている場合はダケ節は程度用法の解釈が不可能となる。
c. しかしそのままでは程度副詞をとることのできない動詞の場合でも、「たくさん」「よく」といった程度を持つ要素を補うと程度用法の解釈が可能となる。

(71) の性質は程度用法のダケ節が程度副詞位置からの空演算子移動によるものであるとすると説明がつくように思われる。程度用法のダケ節が程度副詞位置からの空演算子移動によるものであるとすると、程度副詞位置の空所が保証されなければならない。実際、(71b) から分かるように、程度副詞位置が保証されない場合には程度用法は不可能となる。それに対して (71a) や (71c) から分かるように、程度副詞位置が保証される場合には程度用法が可能になる。

以上の議論は、程度用法のダケ節は節内の程度副詞位置からの空演算子移動が関与しているという主張を支持するものであると思われる。

4 おわりに

本稿では、「半分」関係節・「人数」節の先行研究をふまえてダケ節の移動の性質を調べた。検証の結果を以下にまとめる。

(72) ダケ節の移動の性質

- a. 遊離数量詞・程度副詞の空所が義務的である。
- b. 島の制約に従い、空所と「だけ」の関係は非有界的である。

ダケ節内に空所があり、その空所と「だけ」の関係は非有界的であり、QR のような局所的なものではないことが分かった。そして島の制約に従うという性質を考えると、ダケ節にも「半分」関係節・「人数」節と同様、空演算子移動が関与していると考えられることを示した。

また、ダケ節の空所の統語論的・意味論的性質を江口 (2002) に基づいて記述し、その結果から、数量用法のダケ節の空所は遊離数量詞位置の空所であり、程度用法のダケ節の空所は程度副詞位置の空所であるという主張 (72a) に対する更なる証拠をあげることができた。そして、数量用法・程度用法のダケ節にそれぞれ遊離数量詞位置・程度副詞位置からの空演算子移動が関与しているとする、それぞれの解釈は空演算子の移動前の位置の違いによって決定されることが示された。

参考文献

- 江口正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」, 『福岡大学人文論叢』第 33 巻第 4 号, 2147-2167.
- Huang, C.-T. J. (1999) "Chinese Passives in Comparative Perspective: "To Be a Women Is Extremely Bothersome!" How Young Chinese Women Talk About", in *Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 29(4), 423-510.
- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』, 大修館書店.
- Ishii, Yasuo. (1990) "'Half-relatives' and Syntactic Operator Movement in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 12, 80-95.
- Ishii, Yasuo. (1991) *Operators and Empty Categories in Japanese*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

- Kikuchi, Akira. (1994) "Extraction from NP in Japanese", in Nakamura, M(ed) *Current Topics in English and Japanese*. Hituzi Syobo, 79-104.
- 工藤浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」, 『日本語の文法 3 モダリティ』, 岩波書店, 161-234.
- 黒田成幸 (1999) 「主部内在関係節」, 黒田成幸・中村捷 (編) 『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』, くろしお出版, 27-103.
- 前田直子 (1996) 『日本語複文の記述的研究 —論理文を中心に—』 大阪大学博士論文 (未公刊).
- 森山卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」, 『京都教育大学国文学会誌』 20, pp. 60-65.
- 岡田理恵子 (2003) 『数量・程度を表す節における空所の統語論的・意味論的性質—現代日本語におけるダケ節を中心に—』, 京都大学修士論文.
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」, 『日本語教育』 14, 42-60.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』, 大修館書店.
- 奥津敬一郎 (1986) 「形式副詞」, 『いわゆる日本語助詞の研究』, 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (編), 凡人社, 33-104.

要旨

現代日本語には次のような、節形式で数量および程度を表す表現がある。(ダケ節と呼ぶ。)

- (a) 次郎は、[太郎が食べた] だけ、ケーキを食べた
- (b) [子育てに苦労した] だけ、子供がかわいいのはあたりまえだ

(a) のダケ節は数量を、(b) のダケ節は程度を表している。奥津 (1986) では数量、程度といった意味は語が辞書的意味として持っているものであるとされている。しかし本稿では、ダケ節が移動を伴う構文であることを示し、移動を仮定することで数量および程度の意味が導き出せることを示す。

現代日本語では節形式で数量および程度を表す形式は他にも見られる。例えば以下の例である。(それぞれ、「半分」関係節、「人数」節と呼ぶ。)

- (c) ジョンは [ボブが家賃に ec 使う] 半分にギャンブルに使う
- (d) [月曜日の会議に集まった] 人数

「半分」関係節、「人数」節に関してはいくつかの先行研究があり、空演算子移動が仮定されている分析もある。これらの先行研究を基にダケ節に関して考察を加える。まず 2 節で「半分」関係節および「人数」節に関する先行研究を概観し、若干の訂正を加える。これらの節には遊離数量詞位置からの空演算子移動が関与していることを確認する。これをふまえ 3 節では、数量用法のダケ節は遊離数量詞位置からの空演算子移動が、程度用法のダケ節は程度副詞位置からの空演算子移動が関与していることを示す。また、この記述が正しいとすると、ダケ節の数量用法、程度用法という区別は辞書に登録する必要はなく、空演算子の移動前の位置の違いによって導き出せることを示す。

(受理日 2003 年 7 月 24 日 最終原稿受理日 2003 年 12 月 25 日)